



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 9 月 19 日(金)

発行 館長 加藤 智 一

七日町

2025. 9. 15 山形新聞より

私の祖父母も両親も、生粋の山形市民ですが、全員「なのかまち」と呼んでいました。なんの話かというと、「山形市七日町」の読み方です。どうやらコンプライアンス的には、「なぬかまち」が正しいらしい。はたして山形市民でこの事実をご存じなのは何人いるのでしょうか。確かに町名表示や道路標示は「Nanukamachi」となっているようです。山形市に限らず、江戸時代以前から、城下町には「七日町」「三日町」「十日町」など、数字が付く町名が多くあります。そこには、市日（いちび）制度という歴史的背景がありました。城下町では物資の流通や商業の活性化を目的に、定期的な市（いち）＝市場が開かれていました。その市が開かれる日を「市日」と呼び、例えば「七」のつく日（7 日、17 日、27 日）に市が立つ町は「七日町」と名付けられました。山形城を築いた最上義光公は、商人や職人の町を城の外に整備しました。同時に産業振興のため「市日」を制定しました。「市日」は農村からの産品や職人の品を売買する場であり、定期市があることで人が集まり、商業が発展しました。また、「市日」が町の性格や役割を示す目印にもなりました。事実こうした町名は、単なる地名以上に、地域の歴史・経済・文化の記憶を宿しており、山形の七日町も、今なお商店街としてその名残を残していて、まち歩きの楽しみのひとつになっています。

実は「七日町」を「なぬかまち」と読むのは、山形だけではなくありません。全国的にも「なぬかまち」と読む地域が複数存在しています。その一つが熊本県人吉市。城下町の町名として「なぬかまち」が使われています。また、岐阜県高山市では、公的な表記として「なぬかまち」が採用されています。因みに山形市の場合は、1963 年（昭和 38 年）7 月、学識経験者や地区代表者からなる市住居表示委員会が決定したそうです。決定の際、根拠の一つとしたのが、昭和 29 年 3 月に発効した「山形市の町」。町の沿革と構成を記した章に「七日町（なぬかまち）」との振り仮名表記がありました。また、「古語」では「七日」は「なぬか」と読むのが正統とされているらしく、国語辞典でも「なのか」は「なぬか」の転訛と説明されています。ただし、日常的には「なのかまち」と呼ぶ人が圧倒的に多いのも事実です。地元の感覚と公的表記がズレているのは、山形に限らず他地域

でも見られる現象です。そう言えば、「いばらぎ」なのか「いばらき」なのかなんて論争も過去にありました。私見ではありますが、日常的には「なのかまち」と使っていたとしても、「実は・・・」ッてな具合に「なぬかまち」の蘊蓄をご披露する方が、歴史の重みが相手に伝わるのかなと思う次第であります。



広がるアップサイクル

2025. 9. 19 朝日新聞より

今回ご紹介する企業の取り組み。「アップサイクル」とは、食品加工の工場で出



る野菜の切れ端や産地での規格外作物など、従来なら廃棄される物に付加価値を付けて生まれ変わらせる取り組みを指します。

キリンビールでは、昨年から、規格外果実を使った缶チューハイ「氷結」を作るプロジェクトに取り組んでおり、これまでに横浜のブランド梨「浜なし」、高知県産「ポンカン」、山形の「尾花沢すいか」のチューハイを販売しました。その結果、「浜なし」は 3.4 万個分、「ポンカン」は約 31 万個分の食品ロスが削減できたそうです。また、この取り組みでは、1 本につき 1 円の売り上げが農家支援に充てられるのも特徴で、「浜なし」では約 600 万円が寄付され、苗木の購入費用などに充てられ、「ポンカン」での寄付額は約 570 万円で糖度や酸度を計測する機器の購入などに活用されたと言います。

記事には書いてなかったけれど、レモンの「ピール（果皮）」を使ったチューハイってのもそれか？